

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：13901

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K23131

研究課題名（和文）高齢者施設のケア職員の視点による「尊厳」の要素の具体化と概念マトリックスの作成

研究課題名（英文）Concretization of elements of "dignity" from the point of view of care staff in elderly facilities

研究代表者

長谷川 奈々子（HASEGAWA, NANAOKO）

名古屋大学・医学系研究科（保健）・助教

研究者番号：00881723

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：尊厳の保持は介護保険法にも明示されているが、尊厳あるケアの実践は容易でない。本研究の目的は、尊厳の可視化のためケア職員の視点から尊厳の概念マトリックスを具体化することである。ケア職員に対するインタビューの結果、＜職員側の要素＞には＜より良いケアの個人的検討＞＜介護と医療的な視点を統合した判断＞＜十分な同意なく施行せざるを得ないケアの困難感＞＜施行したケアの内省＞＜職員の尊厳よりも入居者の尊厳を優先する感覚＞＜入居者の反応に対する個人的感情＞＜職員自身の私生活＞というサブカテゴリーが含まれ、入居者の視点に比べ、より具体的なサブカテゴリーが含まれていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はケアにおける尊厳に関する日本ベースの知見を増やすことに貢献した。さらに、ケアにおける尊厳の要素を具体化することができたため、今後臨床や介護現場に具体的な尊厳あるケアを提示することにつながると考える。また、入居者の捉える尊厳と職員が捉える尊厳とは関連のある部分と異なる部分が示され、このことは尊厳あるケア実践の困難さの解明に向けた一助になると考える。職員は十分な余裕がない中で尊厳あるケアを提供することには大きな苦勞を伴い、尊厳を損なうようなケアしかできないときには職員自身の尊厳が脅かされることが示されており、本研究は入居者だけでなく職員の尊厳を守ることに貢献すると考える。

研究成果の概要（英文）：Although the Long-Term Care Insurance Act clearly states "to maintain dignity", it is not easy to practice dignified care. The purpose of this study was concretization a concept matrix of dignity from the care staff's perspective in order to visualize dignity. As a result of In-depth interviews with care staff, the themes of <factors on the staff side> contained 7 sub-themes. This category of staff's perspective contained more specific subcategories than the resident's perspective.

研究分野：看護倫理

キーワード：老年看護 看護倫理 高齢者施設 尊厳

1．研究開始当初の背景

世界規模で高齢化が進む中、世界一の超高齢化社会となった日本の取り組みは世界から注目されている。介護保険法には尊厳の保持が明示されており、世界的には高齢者施設における尊厳に関する研究が増加している。しかしながら、実際にどのように尊厳あるケアを実践するのかを明確に示した基準はない。「尊厳」は損なわれたときにより深く理解されるものであるため、尊厳のない状況を作り出している側には分かりづらいとされている。また、職員は十分な余裕がない中で尊厳あるケアを提供することには大きな苦勞を伴い、尊厳を損なうようなケアしかできないときは職員自身の尊厳や健康が脅かされることも示されている。つまり、入居者だけでなく職員を守るためにも、尊厳を文脈化・可視化する必要性がある。

こうした中で、研究代表者は先行研究で尊厳の可視化を目的として、高齢者施設入居者に対する詳細な個別インタビューとシステムレビューを行い、ケアにおける尊厳の概念統合を行った。その結果、「ケアにおける尊厳」と「尊厳あるケア」の2次元マトリックスによる位置づけや、概念の特徴を新たに示すことができた。しかし「尊厳あるケア」は、入居者と職員の相互作用の中に位置づけられたが、職員の視点については文献レビューのみから作成したものであり、実際の職員が持つ視点とズレがないかについては確認できていない。また、先行研究において「尊厳」はそれぞれ自身の立場に近い部分にコード数が多く、職員は入居者の尊厳が見えにくい可能性が示された。そのため、職員が入居者の大切にしている尊厳をどの程度認識することができているのかについても検証する必要があると考えられた。

2．研究の目的

本研究の目的は、二つある。一つは「高齢者施設ケアにおける尊厳の概念マトリックス」を職員の視点から検証し、特に入居者の視点では語られることの少なかった職員側の要素を具体化することである。また、二つ目の目的は、先行研究結果と本研究の成果を比較することで、入居者と職員という立場の違いによる尊厳の視点の違いを明らかにすることである。

3．研究の方法

先行研究において、尊厳あるケアは相互作用の中心に位置づけられており、入居者側だけでなく職員側の要素も重要になる可能性が示唆された。そのため、職員に対する解釈学的現象学の手法を用いた個別インタビューを行うことで、その主観的経験を明らかにすることとした。研究方法については、質的研究報告のための世界的な統合基準(COREQ)を満たすようにデザインされた。サンプリングは、合目的抽出法で行った。できるだけ幅広い状況の参加者とするために、施設の立地条件・設立母体・規模、そして参加者の年代・性別・経験年数などが異なる参加者とした。1回目のインタビュー内容は、属性情報と共に、入居者の方とのかかわりの中で尊厳がとても大事にされたと感じたこと、尊厳が大きく傷ついたと感じたこと、尊厳に影響すると感じたことなどとした。2回目のインタビューでは、1回目に話した内容の修正や追加がないかを確認し、「参加者による分析結果の確認(Participant checking)」を行った。インタビューは、施設と参加者の同意を得た後にICレコーダーに録音し、音声データを逐語録に起こした。

本研究は、名古屋大学大学院医学系研究科生命倫理委員会による倫理審査の承認(承認番号: 2021-0117)を得て行った。

4．研究成果

本研究はコロナウイルス感染症2019の感染拡大の最中に行われた。各高齢者入居施設は面会禁止などの感染対策措置を施行せねばならない状況にあり、インタビュー協力施設のリクルートは難渋した。また、インタビュー日程のキャンセルや変更、期限のない延期もあった。しかし、インタビュー時の感染対策の強化や各施設の協力などにより、参加者を集め実施することができた。まずは、入居施設に1年以上勤務している看護職員2名に対し、個別の半構造化インタビューを2回ずつ、計4回実施した。

図1に示す高齢者施設のケアにおける尊厳の概念マトリックスの中でも、本研究の焦点は職員の立場に近い「職員側の要素」というテーマであった。その要素に関わる具体的な語りを逐語録からコードとして切り出し、類似した内容ごとにまとめ、サブカテゴリーに分類した。

計85コードから7つのサブカテゴリー、<<より良いケアの個人的検討>>、<<介護と医療的な視点を統合した判断>>、<<十分な同意なく施行せざるを得ないケアの困難感>>、<<施行したケアの内省>>、<<職員の尊厳よりも入居者の尊厳を優先する感覚>>、<<入居者の反応に対する個人的感情>>、<<職員自身の私生活>>が得られた。

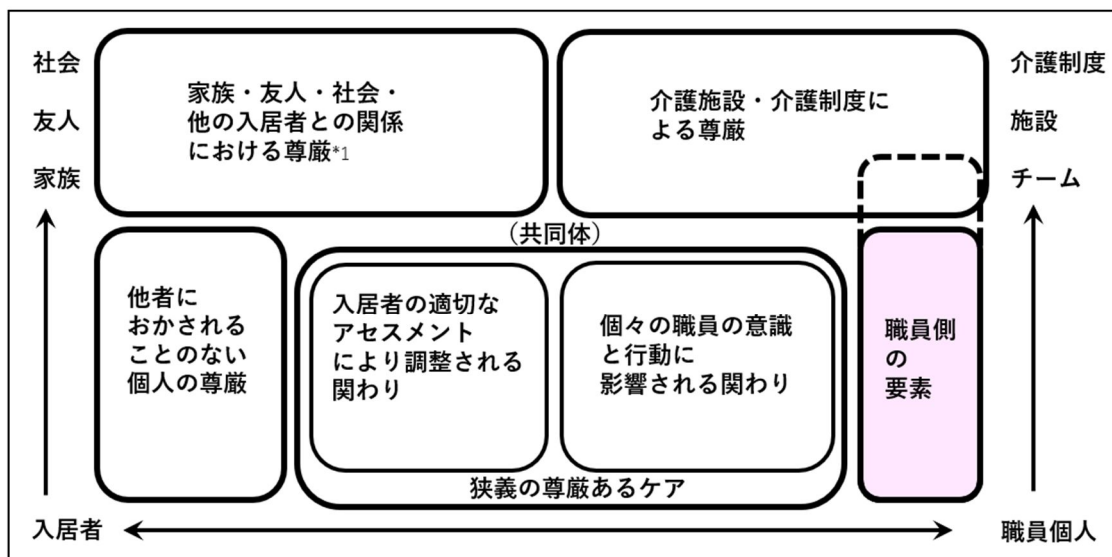


図1 高齢者施設のケアにおける尊厳の概念マトリックス

また、高齢者入居施設で働く看護師の視点からみた「ケアにおける尊厳」の＜職員側の要素＞と先行研究から得られた入居者の視点を比較した。また、初期分析の結果を2名の参加者に提示し、参加者による分析結果の確認を行った。それらの意見によって、再度、逐語録を確認し、サブカテゴリー名の再検討を行った。

比較の結果(表1)、入居者を対象としたインタビューによるサブカテゴリーと関連しており、より具体的なサブカテゴリーと、関連のない新たなサブカテゴリーに分けられた。＜より良いケアの個人的検討＞と＜介護と医療的な視点を統合した判断＞は、入居者の視点のサブカテゴリー＜ケアの確実な施行＞に関連すると考えられた。＜十分な同意なく施行せざるを得ないケアの困難感＞は、入居者の視点のサブカテゴリー＜職員の葛藤＞に関連すると考えられた。＜施行したケアの内省＞と＜職員の尊厳よりも入居者の尊厳を優先する感覚＞は、入居者の視点のサブカテゴリー＜職員個人の素質＞に関連すると考えられた。また、今回＜入居者の反応に対する個人的感情＞、＜職員自身の私生活＞という新たな視点のサブカテゴリーが得られ、他者におかされることのない職員個人の尊厳の要素が明らかになったと考える。

これらのことから、高齢者施設で働く看護職員の視点からみた「ケアにおける尊厳」の＜職員側の要素＞は入居者の視点に比べ、より具体的で新たなサブカテゴリーが含まれることが明らかとなった。

表1 入居者とケア職員の立場の違いによる＜職員側の要素＞の比較

入居者を対象としたインタビューによるサブカテゴリー	ケア職員を対象としたインタビューによるサブカテゴリー
ケアの確実な施行	より良いケアの個人的検討 介護と医療的な視点を統合した判断
職員の葛藤	十分な同意なく施行せざるを得ないケアの困難感
職員個人の素質	施行したケアの内省 職員の尊厳よりも入居者の尊厳を優先する感覚 *入居者の反応に対する個人的感情 *職員自身の私生活

*入居者を対象としたインタビューの＜職員側の要素＞には関連するサブカテゴリーなし

さらに、より詳細なサブカテゴリーを明らかにするため、インタビュー協力のリクルートを継続した。研究期間の後半には徐々に感染対策が変更され、各協力施設による個別インタビュー調査の受け入れが再開された。その結果、さらに7名に対する個別インタビューをそれぞれ2回ずつ、計14回施行することができた。今後はこれらの分析も行い、論文化を予定している。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 長谷川 奈々子
2．発表標題 高齢者施設で働く看護職員の視点からみた「ケアにおける尊厳」の特徴 - <職員側の要素> の一次分析より
3．学会等名 日本看護倫理学会第15回年次大会
4．発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------